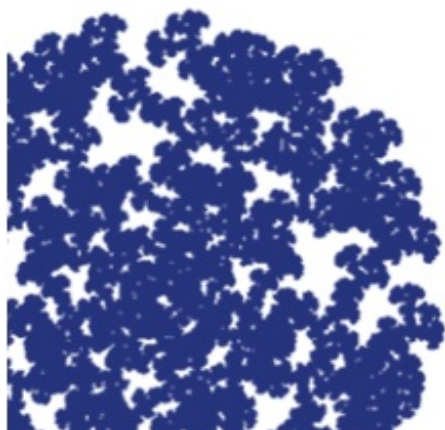


詩集「あだすき」



月ヶ瀬ゆう

地球と月

あなたの名前をつぶやく
涙がこぼれた
思い出すことが
こんなにもつらくて
無邪気に名前を呼んでいた
あの頃に戻れたなら

たった数カ月で散った
淡い恋だったけれど
時が過ぎるごとに
こんなにもあなたが
大切な存在だったって
心が震えるの

あなたが地球なら
私は月
あなたのまわりを
ぐるぐるまわるけど
けして近づくことはできない

まぶしいくらい美しい地球
きらめきながらまわって
軌道を決して外れない
正しくて誠実な
青い青い地球

私はこんなにもちっぽけで
ただ地球の夜を照らすことしか
できないの
名前を呼んだって届かない

会いたい
会いたい
会いたいよ

軌道を外れて

その海の中に飛び込みたい

あなたはあたたかく

受け入れてくれるかしら

二度と輝くことができなくても

あなたの海の中で

優しい呼吸を感じていたい

あなたの名前をつぶやく

涙がこぼれた

もう会えないということは

わかっている

わかっているても

わかっているても

日を追うごとに

色めき立つこの想いは

どうしたらいいのでしょうか

あなたが地球なら

私は月

近づくことも

結ばれることもない

ふたりのあいだの

決定的な

距離

光の彼方へ

別れはひたひたと近づいていた
はじめから決められていたの

泣いて泣いて
困らせたあの夜
ずっとそばにいてくれたね

あなたに逢えて
こんなにも優しい人がいるんだって
はじめて知った

優しさは強さ
あなたは私をおびやかす
全てのものから
私を守ってくれた
とても強くて
とても優しい人

パーフェクトな笑顔
「君は放っておけないから」
いつもそばにいてくれたね

幸せだったのに
あんなに幸せだったのに
あなたは私を置いて
いってしまった
この別れは
はじめから決められていたの

近寄れない
声も届かない
呼んでも
叫んでも
遠ざかる背中
蜃気楼のように

はじめからいなかったかのように
遠ざかる
手の届かない
あの光の彼方へ
いってしまった
こんな闇の中に
わたしを置いて
いってしまった
私も行きたかった
あの光の彼方へ
全てを捨ててもよかったのに

放っておけないんじゃないかったの
守っていてくれるんじゃないかったの
ずっとそばにいてくれるんじゃないかったの

私が泣いても
嫌がらずに
いつもそばにいてくれた
そんな大切な思い出たちを
胸の中にぎゅっとしまっ
てあなたが光の彼方へ消えてゆくのを
黙って見送った
それが私のできる
あなたへの最大の
感謝のしるしだから

泣き虫を卒業できるように
私も強くなるよ
あなたのように
人に優しくできるように

誰かのことを
救えるように
私があなたに
そうしてもらったように

散りゆく桜

はらはらと散る桜のように
終わってしまうのは
なぜでしょう
こんなにもさびしいのは

水面に浮かぶ桜の花びらは
幸福には見えなくて
ただ残った
愛のぬけがら
むなしくて
かなしい

愛情ははかなく
時間は残酷

始まりと終わり
永遠と一瞬
不変と変化

散りゆく姿が
優美ならば
それはとても潔くて
また愛を探しなさいと
私たちに言ってくれているよう

桜
桜
ソメイヨシノに
シダレザクラ
小さな花びらたち
清楚な小さな愛情たち
まるで雪のように
降り積もる

心だけあの場所に置き去りのまま

今私はたったひとりで
散りゆく桜を見ている

さびしいけれど
むなしいけれど
かなしいけれど

あの人をあんなに愛した
あの日々は私の宝物
全身全霊をかけて
愛したあの日々は
もう戻ってはこないけれど
桜は言ってくれている
「永遠じゃないからこそ美しい」

ひらりとおちた桜に
ぽとりとおちた涙

さびしいけれど
むなしいけれど
かなしいけれど

好きでした
だい好きでした

凶暴な恋心

おとなしくしていたかと思ったら
急に牙をむくんです
何度も噛みつかれました
切り口は鋭く
痛くて痛くて
血が溢れ出るのです
この想いは凶暴で
私の手に余るのです
どんなに強く求めてもけして報われぬ愛情
この想いは
はじめから凶暴だったわけではなく
それどころかはじめは
あたたかくて優しい
おだやかな月のようでした
あなたがそばにいてくれたから
そっと頬に触れてくれた
あたたかなてのひら
おだやかな微笑み
あなたがそばにいてくれたから
夜空を照らす三日月のように
優しい優しい
恋心でした
そう この恋心は
あなたがいなくなってしまってから
牙をむくようになったのです
涙を流しながら
眠っていたかと思えば
急にうなりながら
噛みついてくるのです
流れ出る血液が
あなたに叫んでいるのです
愛していると
愛してくださいと
そっと肩を抱いてくれた
あたたかな その腕

おだやかな その呼吸
幸福だった やさしい唇
さびしくて震える恋心は
今も泣いています
愛していると
愛してくださいと
それは助けを求める声に似て
おとなしくしていると思ったら
急に牙をむくんです
あなたが愛してくれたなら
そっと抱きしめてくれたなら
きっとおとなしくなって
その腕の中で眠るのでしょう
私の心が血を流すことも
なくなるのでしょう
ただ
あなたに抱きしめられたい
あたたかい腕の中で
眠りたい
私の
恋心
今はさびしい
恋心

どこへも行かれなかったあの夏

あの夏

どこへも行かれなかった

あの夏

あなたが私の

すべてだった

光り輝いていたあの恋心は

私の心臓につきささったまま

今もチクチクと

痛いよ

この痛みは

いつまで続くのでしょうか

会いたくて

苦しくて

苦しいだけなのに

どうして人は恋をするのでしょうか

報われぬ恋心は

行き場をなくして

こぼれおちる

抱えきれずに

両の手を肩に回し

冷えた体に

恋心を抱く

たったひとかけら残った

心臓に残る

あなたへの想い

痛いよ

あのころは

蝉が鳴いていたね

わんわん わんわんと

響く
蝉の声
こぼれる汗の玉

今は寒くて
夏の終わりを
受け入れられぬまま

優しかったあなたの微笑みを
声を
手を
言葉を
まなざしを
まだ
鮮やかに覚えているのに

受け入れられぬまま
取り残される
心臓に残った
大切な
大切な
恋心

もう会えない悲しみを知っていても
なお
輝きを失わない
小さな
小さな
恋心

ラブレター

ふとした瞬間に
あの頃の想いが
よみがえって
泣きたくなるのです
好きでした
大好きでした
もう 何年も経つのに
何年たっても
あなたのことが
忘れられなくて
苦しくて

お元気ですか
まいにち
笑っていますか
まいにち
誰かを
救っていますか
あなたは多分あのころのまま

私も変わらずにいます
弱虫で
泣き虫で
寂しがりやで

そんな私に
優しく
してくれた
手を
握ってくれた
あなたが差し出すてのひらを
いつも
両手で握り返した
少ずつめたいあなたの手は
大きくて

優しくて
胸が痛くなりました

恋を愛に変えることは
できなかったけれど
あなたは
私の心の中で
永遠に
生き続けるでしょう

まだせつなくて
まだ会いたくて
仕方のない時もあるけれど
いずれ春の日の光のように
心を照らしてくれる
そんな恋
だったのです

だから
いつまでもお元気で
いつまでもあなたらしく
優しく
微笑んでいて

一生忘れないから
あなたと巡りあえたことの
奇跡を私は一生忘れません

ストロベリー

お別れの時

あなたは

私に手をさしだした

私はその手を

両手でにぎりかえした

もう会えないの

あなたとの日々は

いまでも胸がきゅんとせつなくて

甘酸っぱい優しい

思い出なのです

あなたはいつだって優しくて

私はいつだって幸せで

終りがくることは

はじめからわかっていただけ

恋をせずには

いられなかった

笑顔も声もパーフェクトで

あんなに好きになったひとは

過去にも

未来にも

きつといない

水の滴り落ちる

甘酸っぱい

ストロベリー

太陽の光に輝く

そんな恋でした

あなたがさしだした手は

どんな意味を持っていたの

単なるお別れ？
それとも少しでも
私のことを
好きでいてくれた？

さっと手を差し出したその姿は
やっぱりパーフェクトで
あなたは罪な人ね

ストロベリーは
きゅっと
酸っぱい

あなたと食べたかったな
こんな
ひとりで泣きながら
食べたくなんて
なかったな

恋の終わり
涙は枯れることなく
流れ続けるけど
この痛みもきっといつか
消えてゆくのでしょう
さびしけれど

消えてゆくくらいなら
痛いままがいい
忘れてゆくくらいなら

すき

突然襲われる
心臓をどこかにおとしたような
喪失感

失った恋は
あまりにも重すぎて

輝いていた
あの夏の日
わたしの時間は
止まったまま

泣きたいほど
会いたい
でももう叶わない
あなたの不在
慣れたくないのに

すき

あなたの笑顔を
うしなうのがこわかった

ただ

すき

そう伝えなかった
もう会えない

わたしの声に
耳を傾けてくれた
あなたに恋をした

あの夏

ふたりで
ラムネを飲んだね
瓶に浮かぶ水滴が
太陽に輝いた

蝉の音がうるさいから
大きな声で
泣いてもいいよね

失ったあの夏を
どんなにつらくても
忘れない

大声で

すき

そう叫んでも
いいよね

わたしの言葉は
虚しく消えるけど
忘れない
恋した日々を

割れたラムネ瓶を
拾い集めるように
すべてしまって
心の奥で
輝く
わたしの恋は
割れなかったビー玉だ
どんなに強く
落下しても
割れなかった
ビー玉だ

綺麗

瑞々しいラムネを纏ったビー玉は
光を当てればまた輝く

わたしのあなたへの
恋心のように

悲しみの花

あなたを好きになってしまったから
悲しみの花が咲いた

睫毛に灯った涙が
ぽろりぽろりと
零れ落ち
泉となって
心を浸す

会えない悲しみ
すきだと言えない悲しみ

悲しみの花は
私の胸の奥で
泣くの

触れられない悲しみ
呼んでも届かない悲しみ

いくら泣いたって
叶わない
憐れな恋の花

上弦の月が照らす
しずかな夜
この夜はあなたにつながっている
そう思うと
やさしい
やさしい
気持ちになれる

あなたが大切だから
この花は
涙の泉の中で
枯れることなく咲くの

眠れない夜を
幾度も過ごし

忘れられない想いを
あふれるほど抱え

月の光のもとで
今夜もあなたに恋してる

悲しみを患った
私の心は
張り裂けそうに痛いけれど
どうしようもなく
痛いけれど

泣いてばかりじゃ
だめだよ

だってこんなにも
美しい
あなたを想う
誇り高い
悲しみの
悲しみの
花

こんなにも
美しい想いが
胸の内に
あるのだから

しずかな息

眠ってしまった
私の中の
あなたへの想いが

しずかに
おだやかに
寝息を立てている

いつかこんな日が
くるだろうとは思っていた

会えないって
残酷なことなのね
時がたてばたつほど
うすれてゆく
ぼやけてゆく
あんなに愛していたのに

あなただけを愛すると
あの日誓ったのに
離れても鮮やかに
いつまでも想っていると
あの日誓ったのに

しずかに眠る想いは
本当に安らかで
もう叶わないことを知っているの
あたたかなあの笑顔を
もういちど見たくても
もう叶わないということを

会いたい
会いたって
もう心は叫ばないの
しずかに

おだやかに
寝息を立てている
あなたの優しさにくるまれて

いつか泣きながら
目を覚ます時が来るのかな

痛みとともに
あなたをまた求める日々が

悲しみとともに
叶わぬ恋を求める日々が

大切に
大切に
この想いを守ってしよう
赤児のように優しく抱いて
今はただ
あたたかく丸まった
恋の記憶を
愛の名残りを
優しく抱いて
しずかな息を感じてしよう